

平成 29 年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

視点	4 年間の目標 (平成 28 年度策定)	1 年間の目標	取 組 の 内 容		校 内 評 価		学校関係者評価 (3 月 14 日実施)	総合評価 (3 月 22 日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒が自ら課題を発見し解決する力を育み、主体的に学ぶ意欲を高めることを目指した不断の授業改善の実施等、これからの時代に求められる資質・能力の育成に向けた教育活動の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業と定期テストの効果的な連動。 ○ALの視点を意識した授業実践に向けた職員研修の充実。 ○理数教育推進校としての取り組みの一環として、1 年総合的な学習時間において課題解決学習を実践。 ○KSC (スタートキャンプ) の内容の見直しと改善。 ○アランデル高校交流事業の推進。 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業時間の最大限の確保と適切な学習評価のための定期テストの実施。 ○ALの視点を意識した授業実践の推進を図るため、公開研究授業・研究協議会及び授業づくり研修のテーマに位置づけ研修を実践。 ○総合的な学習の時間における課題解決学習のためのカリキュラムを実践。 ○科学オリンピック等外部での発表機会への参加。 ○生徒が本校の生徒として主体的に考え責任をもって行動するためのカリキュラム作成とその実践。 ○アランデル高校訪問カリキュラムの充実はもとより、来校のための受け入れ体制の整備。 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業時間を 1 単位当たり 35 時間確保できたか。定期テストを過不足なく実施できたか。 ○教員のALへの理解が深まり実践への意識が高まったか。(職員アンケート) ○生徒による授業評価項目 4 の回答 1・2 が 10%以下になったか。 ○研究成果中間発表会における研究成果の内容と次年度に向けた計画準備ができていくか。 ○各種発表機会への参加者数が増加したか。 ○KSCのカリキュラムにより、生徒が主体的に考え責任をもって行動ができるようになったか。(生徒アンケート) ○アランデル高校来校の体制が整えられ、実践できたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・試験回数見直しにより授業時間を確保した。 ・公開授業研究を 11 月に実施。高大接続改革を意識した授業づくりをテーマとしたことで意識が高まった。 ・生徒による授業評価では項目 4 の 1・2 の数が減少している。 ・理数教育推進に関連して生徒が以下のとおり外部機関等の行事で発表等を行った。(県立高校研究指定校成果発表会)(神奈川県立高等学校 7 2018)(イノベーションキャンプ 2017)(第 17 回日本再生医療学会総会「中高生のためのセッション」)。(生物リリック) ・文化祭で有志生徒が科学振興会として研究成果発表を行った。 ・KSCはカリキュラムを刷新したことによる成果が生徒アンケートの随所に見られた。 ・無事終了したが、先方との連絡に時間を要したため事前準備が十分ではなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏季休業直後に定期試験を実施することの是非についてさらに議論と共通理解が必要。 ・個人のレベルではなく教科としての授業づくりへの意識を高めることが必要。 ・授業評価の分析結果の活用について工夫が必要。 ・生徒の興味関心に応えるためには大学や研究機関との連携は必須。連携先の開拓が課題。 ・理数に高い興味、関心を持っている生徒への支援体制を整え、理数に関する部活動の創設につなげる。 ・キャリア教育の視点からプログラムをさらに充実させることが必要である。 ・実施内容の振り返りを行い、次期の訪問の際のプログラム開発を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・県相は組織的な授業改善が比較的進んでいる。研修にも積極的に取り組んでいる。他校に先んじて新たな取組を思い切って進めていくべきである。 ・学習面などで教員が生徒の面倒を丁寧にしている様子が伝わる。 ・アクティブラーニングの手法を学力向上進学重点校の取組にどう生かしていくのかについて生徒と教員間でさらに意識の共有を進める必要がある。 ・新しい学習指導要領でいう「主体的・対話的で深い学び」について、今までの取組を生かしてすべての場面において意識をして進めていくべきである。 ・ホームステイ受け入れに多くの生徒が手を挙げるなど国際交流への意欲が高まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期試験期間の変更により、1 年生の夏期講習受講者が前年度よりも増加した。 ・生徒による授業評価の結果は継続して上向きの傾向を示している。各教員が授業に工夫を凝らしている様子が見える。 ・生物リリックやイノベーションキャンプに参加した。 ・文化祭での科学振興会の発表は今後理科部創設への動きにつながるものと期待している。 ・KSC はプログラムの充実を図ったことで生徒の反応に変化が見られた。実施後のアンケートでは好評価である。 ・ホームステイ受け入れに多くの生徒が手を挙げるなど国際交流への意欲が高まっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長期休業中の講習については各教科において実施計画を策定し、内容の充実を図る。 ・教科で授業を作るといふ姿勢に欠けるところがあり、教科会を通じた授業研究の推進を図る。 ・生徒の自主的な参加に頼ることなく教職員から積極的に参加を呼びかけるとともに、指導体制を整えるなど、生徒の意欲を高め、参加生徒の増加を図る。 ・学年担任団との連携をさら強化し、生徒が身に付けたことを実践するよう支援したい。 ・先方との連携を密にとり、訪問時のプログラムをより充実したものにしていく。 ・個別の課題についてはチームとして対応すべきものが増えており、連携先についての情報を職員全体に周知していくことが必要である。 ・定期的にいじめ対策会議を開催しているが、いじめは
2 (幼 児 ・ 児 童 ・) 生徒指導・支援	<ul style="list-style-type: none"> ○「礼節・信義・根性」という校訓、「文武両道・切磋琢磨」というモットー、県相 8 C を基盤とした教育活動の展開による、豊かな人間性や社会性の涵養、社会とのつながりを意識し責任を持って関わろうとする人材の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ○豊かな人間性や社会性を育てるため、行事や委員会活動等に生徒自身が主体的に関わるように指導を工夫する。 ○教育相談体制の充実 ○責任を持って他者と関わる態度を育てるため、人権の 	<ul style="list-style-type: none"> ○企画や運営を工夫し、球技大会、体育祭、文化祭等の行事や委員会活動等に生徒一人ひとりが主体的に関わるための指導。 ○学年や関係グループとの密接な関係 ○スクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)の積極的活用 ○生活 G と生徒会 G が連 	<ul style="list-style-type: none"> ○反省を生かし、企画や運営の工夫をしたか。主体的に関わることができたか。(事後アンケート) ○学年の教育相談担当と教育相談 CO、SC との連携が図られたか。 ○ケース会議を設定し、的確に SC や SSW、外部機関につなぐことができたか。(ケース会議の開催回数) ○人権の日指導にお 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事については実行委員会が機能しており生徒の主体性が発揮されている。 ・保健室と連携を図り、必要に応じてケース会議(開催実績は 3 回)を設定したり、SC につないだりしており、教育相談体制は整っている。今年度は養護教諭が不在の期間が長くなり保健室が十分機能しなかった。 ・人権の日の啓発資料は生徒の興味を惹くような内容のものを作成し 	<ul style="list-style-type: none"> ・企画段階から生徒の手に委ねることにより責任感と主体性を育てる視点が必要。 ・人間関係への悩みや心身の不調により登校できない生徒がいるなど生徒の抱える課題が多様化しており、担任だけでは抱えきれない状況がある。養護教諭が対応することが多い。 ・生徒会 G と生活 G の連携については後期に向けて実施し 	<ul style="list-style-type: none"> ・文武両道が本当に出来ているのか、県相生は勉強が大変で、部活動等はできないという不安が中 3 生にはある。 ・部活動を続けている生徒、やめた生徒の数を示すなどして、不安を解消することも必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実行委員会組織は生徒が中心となり行事運営をしっかりと行うことができている。 ・生徒の動向について担任が中心となり早い段階で把握することができており、学校全体の教育相談体制への理解が大きく進んでいる。 ・いじめに関するアンケート等で気になる記述は出てい 	<ul style="list-style-type: none"> ・前例踏襲にとどまることなく、より良いものにしていく工夫を生徒に考えさせる指導を行う。 ・個別の課題についてはチームとして対応すべきものが増えており、連携先についての情報を職員全体に周知していくことが必要である。 ・定期的にいじめ対策会議を開催しているが、いじめは

			日指導にボランティア活動に関連した情報提供を行う。	携し、人権の日の指導で活用する啓発資料としてボランティア活動に関連した調査や募集、活動報告等の情報提供。	いてボランティア活動に関連した情報提供を行った回数。ボランティア活動に参加した生徒の人数。	ており、生徒が興味をもって読んでおり成果が上がっている。	ていく。 ・教員の生徒に対する発言における人権意識の向上に努める必要がある。		ない。人権意識を高める啓発資料は教員が工夫したものを作成している。	どこでも起こりうるという意識をもって、緩むことなく対応していく。
3	進路指導・支援	○大学卒業後の進路（生活設計）をも視野に入れた進路設計を行い、課題を整理・解決し、実現に向けて継続的、計画的に努力する力の育成	○自らの目標に向けて最後まで粘り強く努力を続ける態度を育成する。国公立大学受験者数を増やす。 ○高大連携講座の進化・充実	○進路説明会、総合的な学習の時間、LHR、個別面談等様々な機会を捉えた生徒・保護者への受験の働きかけ。 ○計画的な模擬試験の実施と結果分析。 ○現在の連携大学との連携の強化とプログラムの充実及び新規連携大学の開拓。	○国公立大学を受験する生徒が増えたか。 ○模擬試験等の受験状況と成果の分析結果。 ○講座数が前年度より増加しプログラムの充実が図られたか。新規連携先を開拓できたか。	・進路説明会の講師選定を工夫し、受験に向けた意識を高めている。国公立大学受験希望者は昨年度よりも増加（111名→143名）。 ・模試の結果分析も十分活用されている。 ・総合的な学習の時間のプログラムを一部変更するため、連携講座の増加は見送った。	・前期成績を見てから国公立大学受験を諦める生徒がため面談等で第一志望校を諦めないことを訴えとともに補習・講習の充実を図る。 ・2年次の設定となるため部活動等の大会参加との兼ね合いが課題となっている。	・アクティブラーニングと大学受験、進学率は両立できるのか。 ・大学の受験の仕方はいくつかある方法があるので生徒の進路希望を十分に生かせるように対応すべきである。	・指定校推薦に頼らず受験する生徒が昨年度よりも増加している。国公立大学受験者数も昨年度よりも増加する見込みである。	・夏期講習に限らず、センター試験対策講座を早朝や放課後などに行うことで生徒の学力向上と受験への意欲向上を図る。
4	地域等との協働	○地域から期待され信頼される進学校としての、地域のニーズに応える連携した教育活動の推進による、地域社会に責任を持って進んで関わろうとする人間の育成	○地域社会と積極的に関わろうとする態度を養うため、部活動や委員会活動、行事の取り組みの情報共有を工夫する。	○積極的に地域社会と関わろうとする態度を養うため、部活動や委員会、行事等のボランティア活動に関する情報を学校全体だけでなく、保護者や地域で共有できるような工夫。	○ボランティア活動に関する情報を学校全体で共有できたか。ホームページ等を活用した情報発信ができたか。	・ボランティア参加について生徒への情報提供はできているが保護者等への情報共有には至っていない。	・部活動等を単位として積極的に依頼に応えることで地域からの信頼を得ている。	・学校の魅力を効果的に発信し、人が集まるような学校になってほしい。 ・震災等が発生した時に地域の高齢者等を支援するために生徒や学校の力を借りられるような形を作っていく必要がある。	・保育園や小学校との連携、地域のイベントへの参加など、要請に対しては部活動等を中心にして期待に応えることができている。	・地域に向けての発信の機会になるため生徒会を中心に地域の要請に応えることができるような体制を整える。
5	学校管理 学校運営	○生徒の多様な自主的活動を支える仕組みや、生徒の意見を生かした安全で安心な学習環境の整備 ○事故の未然防止と地域に開かれ、地域と共にある学校づくり推進に資する効果的な広報活動の実践	○「県相を考える委員会」の効果的な運営を図るとともに、生徒が自ら学ぶための環境整備及びAL実践のための環境整備を図る。 ○有益な外部情報の適切な提供 ○防災教育の意義の確認 ○学校説明会等による効果的な広報活動	○「県相を考える委員会」から学校生活におけるさまざまな意見を吸い上げ、学校運営に生かす。また、自習室や攻め机がより利用しやすくなるよう整備するとともに、AL実践のための情報収集や教育ツールの充実。 ○奨学金、留学、公募コンテスト等の情報を生徒への適時の提供。 ○防災教育の必要性の確認と生徒の積極的な参加の促進。 ○本校の実態と実像を理解してもらえよう学校説明会等の実施。	○「県相を考える委員会」からの意見発信の回数。 ○自習室の整備の進捗状況と教員向けの教育ツールの整備状況。 ○適切な時期に適切な情報が提供されたか。その回数。 ○防災教育の必要性を防災訓練等の都度説明し、生徒の体験型訓練を増やしたか。 ○学校説明会等への参加者数とアンケートにおける評価を得られたか。	・「県相を考える委員会」の活動は後期に向けて準備を進める。 ・仮設校舎内にも自習室を設置し、生徒の自習環境の整備を進めた。 ・留学やコンテスト等の情報提供を積極的にしており参加生徒は増加している。 ・実践的な訓練を想定し、避難場所を変更する（サッカー場に避難）など実態に即した訓練を実施している。 ・生徒を前面に出して学校の魅力を発信させる方向に転換している。学校紹介ビデオ等にはさらに工夫が必要である。	・プロジェクター等のICT機器の充実を図るなど、ハード・ソフト両面の整備が急務である。 ・授業での学習活動を補強する意味合いでコンテスト等への参加促進ができてきているか。 ・仮設校舎建設の影響が大きく、避難経路の周知徹底が必要である。 ・生徒が学校の魅力を自分の言葉で発信できるよう経験を積ませていくことが必要である。	・学校紹介ビデオは、全体的な見直しをして、より効果的に学校状況を伝えられるものにすべき。 ・文武両道、勉強もするが、学校生活も充実している—生徒の立場に立ってこのビデオを見てどう思うかという視点が必要である。 ・学校の教育理念を学校説明会で保護者等にしっかりと示すことは必要である。	・仮設校舎内の教材室を自習室として開放した。自習スペースの確保は課題である。 ・即興型英語イベントやアランゲル高校生訪問時のホームステイなど生徒は積極的に参加する姿勢を持っている。 ・サマ・ガ・ダンス(8/15)に約1000名が来場するなど昨年以上の成果があった。説明会の内容については充実を図り、来場者アンケートでの評価は概ね良好であった。	・時間単位であっても自習室として活用できる場所は積極的に開放していく。 ・授業での学習活動とのつながりを意識して指導するという認識を共有したい。 ・生徒が話をする場面をさらに増やすことで本校の雰囲気や来場者に伝えていきたい。そのためのプログラムを継続的に検討する。